

主 題：迫り来る神のさばき 3

聖書箇所：ローマ人への手紙 1章21－23節

なぜ、罪人はさばかれるのか、その理由を説明することでさばかれることが当然の結果であることをパウロは悟らせようとしていました。この説明を聞いていると、だれひとり神に反論することはできません。確かにそうだ、さばかれてしかるべきであると。そのさばかれる理由について私たちは前回学びました。私たちが見たことは、神の存在を認識していながらその神を受け入れない、そこに問題があるということでした。その罪ゆえに、その罪人はさばかれるとこのみことばは私たちに教えてくれました。聖書の話もイエス・キリストのことも聞いたことがない、そのような弁解は神の前にはできない、なぜなら、神はこの自然界を通して私たちにご自身の存在を明らかにしてくださっているからと言います。聖書のことばを聞いたことがなくても、少なくとも、神について知っているとして19節のみことばが教えています。神が造られたすべての被造物を通して神について認識できると言います。神は人々にそのことを明らかに示し続けておられる、だから、弁解はできないと言うのです。罪人が神の前でさばかれるとき、だれひとり私はそんなことは知らなかったという言い訳、反論はできません。罪人の問題は神がいることを知っていながら、その真理を阻んだこと、拒んだことです。そのことは19－20節で教えています。そして、18、20、21節を見ると、しかしながら、人間は間違った選択をしているということをお教えしました。22節では「だから、人間は愚か者である」と言い、23節では「それは真の神ではなく、偽りの神、偶像を造りそれに仕えそれを崇拜したからである」と、そのように話を展開して行くのです。今回も続けて、さばかれる理由について見て行きます。

☆さばかれることがどうして正当なのか？

1. 神の存在を認識していながらその神を受け入れない罪のゆえに 19－20節
2. 神の栄光を辱める罪ゆえに 21－23節

前回(5/4)、さばかれる理由の2.として「神を知っていながら誤った選択をしているゆえに」としましたが、上記のように《2. 神の栄光を辱める罪ゆえに》に訂正してください

前回、私たちは21節から私たちが神の栄光を傷つけている四つのことを見ました。

1) 神の栄光を傷つけている 21節

(1) **神を神として崇めない。**「崇める」とは国語辞典では「尊いものとして敬う」とあります。このことばは「栄光を与える」という意味です。ですから、聖書の欄外に「栄光を帰せず」と記されているのはその意味があるからです。栄光を受けるにふさわしい唯一の神に栄光を帰そうとしない、その方を心からほめたたえようとする、人間が本来造られた目的に逆らっている、そこに問題があるということです。(2) **感謝をしない。**神が一方的な恵みで私たちに与えてくださっていることに対して、私たちは感謝をしないのです。自然の恩恵もあります。私たちはこのすばらしい季節に神が造られたものを見て、そのすばらしさに驚き、その美しさに感動します。それなのに、私たちはその神を覚え感謝もしないのです。マタイ5：45では「それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」と、そのような恵みで神は私たちを愛し扱ってくださるのです。私たちが健康を与えられてこのように働くことができること、いろいろなことができることを私たちは神に感謝しなければいけません。食べ物を与えられることもそうです。一方的な神の恵みです。でも、私たちの問題はそのような神の恵みに対して感謝をしないことです。ルカ6：35でイエスはこのように言われました。「…なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。」と、神は私たちがいかに恩知らずかを分かっておられ、それでもなお神はあわれみを示し続けてくださっていると、悪い人にも神を愛する者たちにも同じようにこのような恵みをくださっているのです。覚えておられますか？十人のらい病人がいやされた話、ルカの福音書17章に出て来ます。皆いやしてほしいと言いました。イエスはこのようにしなさいと言われ、十人全部がいやされましたが、イエスのもとに帰って来たのはたった一人でした。しかも、その人はサマリヤ人でした。イエスは言われます。「十人いやされたのではないか。九人はどこにいるのか。：18 神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」、17：17－18のところでは。神に対して感謝をしないことは罪人だけの問題ではありません。私たちクリスチャンの問題であ

るかもしれません。私たちはどのような恵みをいただいているのか、そのことを覚えるなら私たちは感謝するはずです。愚痴や不満を言う前に、どのようなすばらしい祝福をいただいているのか、その祝福の一つ一つは私たちが受けるにふさわしくないものです。私たちが受けるにふさわしい唯一のものは、神ののろいであり神のさばきです。私たちに与えられている祝福はただ一方的な神の恵みによるのです。そのことに私たちは気付かなければいけないのです。(3) その思いはむなしくなる。そのように神に逆らい続けている人の心はどんなに自分のしたいことをしていたとしても満たされない、満足を得ることはできないと言います。同時に、この「むなしいもの」ということばはエレミヤ2:5では「**主はこう仰せられる。「あなたがたの先祖は、わたしにどんな不正を見つけて、わたしから遠く離れ、むなしいものに従って行って、むなしいものとなったのか。」**」とあり、ヘブル語をギリシャ語に訳した70人訳を見ると、この「**むなしいもの**」ということばは「偶像礼拝を犯すもの」と訳しています。このエレミヤのことばは偶像礼拝に移って行った人々のことを言っていることは明らかです。真の神から偽りの神を崇拝する者になって行った人たちのことです。つまり、聖書のみことばは私たちに、このように神に逆らい続けて行くな、その人は間違いなく偶像崇拝に進んで行くと教えているのです。そのことはこれからも繰り返し見て行きます。(4) 無知な心は暗くなった。パウロ書簡にはこの「心」ということばは50回以上も使われています。すべての考えやことばや行動が湧き上って来るところです。感情、知、意志などすべてのことを支配する、制御するところです。そこが暗くなれば当然、その人の感情にもことばにも行かないにも悪い影響を及ぼします。心に問題があるから、その人は正しく考えることもできないし、正しいことを言えないし、正しく行なうこともできないと言うのです。すべてを司っている心に暗闇がおおっている、そのような状態なのです。だから、霊的真理に関して鈍感なのです。神の真理を聞いても理解できないのです。暗闇がおおっているとそこにある光を見ることができません。暗闇がおおっていると背後にある太陽を見ることができないように、霊的に暗闇がおおっている人は神の真理を見ることができないのです。

ですから、パウロは先ず私たちにどうして罪人がさばかれて当然なのか、その質問に対して答えを与えてくれました。創造主なる神がご自身を明らかにされ、私たちもそのことを認識していながらその神を信じ受け入れようとしない、そこに問題があると。パウロがアテネに行ったときのことを憶えておられますか？使徒の働き17章ですが、そのとき、町は偶像でいっぱいでした。パウロはこのように言います。17:27「**これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。**」と、神は遠くにいて私たちに答えない、そのような神ではない、もし、私たちが神に救いを求めるなら神はすぐに答えてくださるのです。問題は神にあるのではありません。ローマ3:11でパウロはこのように教えています。

「**悟りのある人はいない。神を求める人はいない。**」と、問題は人間にあるのです。神がご自身を明らかにしておられるのにその神を受け入れようとしないのです。神を求めないし、神を必要としない、だから、さばかれるのだとパウロは教えているのです。

2) 神の栄光を汚している 22-23節

22-23節「**彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち**に似た物と代えてしまいました。」と、彼らは自分で自分を「**知者である**」と言います。でも、神はあなたは「**愚かな者**」であると言われます。この「**知者であると言いながら**」とは「断言する、強く主張する」という意味です。つまり、私たち罪人がそのことを主張し続けているのです。私は正しい、私は知恵があるのだと。ところが、そのように主張している人たちは実は「**愚かな者となった**」と言います。このことばをギリシャ語の辞書で見ると「愚かであることを証明する、愚かになる、自分のバカを証明する」と説明されています。つまり、自分がいかに愚かであるかということを罪人は知らないのです。神はご存じです。愚かでありながら自分は賢いと思っている、そこに人間の問題があると言うのです。だから、パウロはこの後、いかに人間は愚かであるのか、その証拠を23節で示すのです。人間の愚かさ、18節でもこのようにありました。「**不義をもって真理をはばんでいる人々…**」と、ここにもそのことが教えられています。どのように「**不義をもって真理をはばんでいる**」のでしょうか？23節を見ると、真の神ではなく偶像を造り、偶像を崇拝するという行為がそのことを明らかにしているのです。23節の最後に「**代えてしまいました。**」と記されています。この動詞は「交換する」という意味です。何と何を交換したのか、パウロが教えるのは「**不滅の神の御栄えを、…かたちに似た物と**」交換したと言うのです。滅びることなく永遠に存在し続けておられる栄光にあふれた神を礼拝するのではなく、滅びる人間や鳥、動物、爬虫類を礼拝することを人間は選択したと言うのです。パウロは23節で「**不滅**」と「**滅ぶべき**」とこの二つを明らかに対比しています。決して滅びることがない、永遠に存在し続ける神を礼拝するのではなく、人間が礼拝の対象として選択したのは、滅び行く、このことばは「**死滅してしまうもの**」という意味ですが、それを選択したと言います。人間は何と愚かなことをしている

のかということを行っているのです。栄光ある神の代わりに神でないもの、栄光のないものを崇拝するようになったのです。

それは神に対する大きな罪です。十戒を思い出してください。神はどのようなことを忌み嫌っておられるのかを、明らかにしておられます。出エジプト記 20 : 3-5 「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。:4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。:5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、」と、非常に厳しいことが記されています。神はどれほどこのように偶像を拝むことを憎んでおられるのか、気付かなければいけないのです。そのようなことを人間は平気で行なっているのです。神でないものを神として崇拝していると言います。申命記でもこのように言っています。4 : 15-19 「あなたがたは十分に気をつけなさい。主がホレブで火の中からあなたがたに話しかけられた日に、あなたがたは何の姿も見なかったからである。:16 墮落して、自分たちのために、どんな形の彫像をも造らないようにしなさい。男の形も女の形も。:17 地上のどんな家畜の形も、空を飛ぶどんな鳥の形も、:18 地をはうどんなものの形も、地の下の水の中にあるどんな魚の形も。:19 また、天に目を上げて、日、月、星の天の万象を見るとき、魅せられてそれらを拝み、それらに仕えないようにしなさい。それらのものは、あなたの神、主が全天下の国々の民に分け与えられたものである。」、ですから、神は私たちに明確にそのような偶像を造ってもならないし、崇拝してはならない、神でないものを神として崇拝することは間違っていると教えます。十戒でも厳しく「わたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、」と言われています。このみことばが教えることは神がどれほどこの罪を憎んでいるかということなのです。たとえば、私たちが神を信じないで逆らうなら、私たちの三代、四代まで救われるチャンスがないのかと、そのようなことは言っていません。イエス・キリストを信じるなら、一人ひとり、どんなに罪深い家庭に生まれ育とうと、その人は救いに与ります。また、どんなに罪の中を歩んで来ようと、キリストによって罪が赦されます。神が私たちに明らかにしようとしておられることは、神は罪を軽く見ておられないということです。神は罪を憎んでおられるということです。

ですから、同じ申命記 4 : 23-24 を見てください。「**気をつけて、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れることのないようにしなさい。あなたの神、主の命令にそむいて、どんな形の彫像をも造ることのないようにしなさい。:24 あなたの神、主は焼き尽くす火、ねたむ神だからである。**」と、これからカナンの地に入っていくイスラエルの民に、モーセはこのような警告を与えるのです。というのは、彼らは神に対する罪が原因で40年間、砂漠をさまよったからです。もう、彼らはいんざりするほどその罪の報いを経験してきました。不信仰ゆえに彼らは約束の地に入ることができなかった、神の約束はカレブとヨシュアを除いて、だれ一人としてその約束の地に入ることができないということでした。そして、神が言われたとおりに、だれひとり入ることができなかった、モーセ自身も入ることができなかった、それほど、神は罪を憎んでおられる方です。新しい世代が誕生しました。彼らは知っていました。自分たちの親の罪を、そして、その罪に対する神の扱いを見て来ました。その彼らにモーセは言います。偶像を崇拝することがあってはならないと。

旧約聖書、エレミヤ 2 : 11 にこのような記事があります。「**かつて、神々を神々でないものに、取り替えた国民があっただろうか。ところが、わたしの民は、その栄光を無益なものに取り替えた。**」と。異教の国のことを引き合いに出しているのです。様々な偶像を崇拝する人々、その国が別の神々に移ったと、そのようなことが今までにあったと、そのことを引き合いに出して、ユダの罪を責めるのです。ところが、わたしを知らない国の人でもしたことがないことを、私の民イスラエルはしたと言うのです。わたしの「**栄光を無益なものに取り替えた**」と、栄光あるわたしから離れて、神でないものに仕える者たちになって行ったと。面白いことは、どの時代でも同じことが語られ、同じことを人間は繰り返しています。この国に住む私たちも同じです。時代が違っても同じことをしています。人は栄光ある神を人のレベルにまで引き下げるのです。ローマ書に戻ってください。23節でパウロが言うように、「**不滅の神の御栄えを**」、栄光に満ち溢れた汚れたところが何一つない神を、人間は人間のレベルに引き下げたのです。不可能のない全能の神を不可能だらけの人間のレベルに引き下げた、聖い罪のないお方を罪に汚れた人間のレベルに引き下げた、永遠に生きるいのちの源を死に対して無力で有限な人間のレベルに引き下げたと言うのです。恐ろしいことに、神ではなくこのような私たち人間を崇拝の対象にしたのです。これは繰り返されていることです。バビロンにおいても、ネブカデネザル王は金の像を造り、その像を崇拝するやうにと人々に命じました。人が崇拝の対象になるのです。何も珍しいことではありません。私たちの国ではそのことをよく見えています。人間の恐ろしいことは、神を人間のレベルに引き下げただけでなく、その後、「**鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました**」。人間のレベル以下のものへと崇拝の対象を引き下げて行くのです。私たちの周りでも爬虫類を神として崇拝しているところがあります。パウ

口は、どうして栄光ある神が私たちのような罪に汚れた人間と同等なのか、どうして、神が人間以下の鳥や動物と同じなのか、地をほうものやのろわれた蛇と同じなのか、考えて見なさいと言います。だから、パウロはこのようなことが人間の愚かさを証明していると言います。人間は知恵があるというけれどどこに知恵があるのか、人間がしていることを見るならそれがいかに愚かさを現わしているかが明らかだと言います。

実は、ここに大きな問題があるのです。22節「**自分では知者であると言いながら、**」と、人間は自分が賢いと思っている、この誤りを信じるころに問題があるのです。神よりも自分が正しいと思う、自分の方が知恵があると言うのです。このプライドゆえにいつまで経っても神の前にへりくだることなく、かえって自分を神よりも優れた地位においているのです。人間は自分には救いが必要だとは思っていません。他の人についてはそうではありません。人には救いが必要だ、けれども、自分には必要だとは思わないのです。なぜなら、そんなに悪いことはしていないし、いい生活をして来ているし、人に迷惑をかけていないし、法に触れることもしていないから、救いが必要なのは私以外の人だと、いかに自分のことが分かっていないか、いかにプライドの高い者か…。また、人間は自分で自分を救えると思っています。だから、一生懸命努力し、頑張り、良いことを守り行なって行こうとするのです。そうすればきっと天国に行けるに違いないと…。また、人間は神が備えてくださった救いに意見する者です。そのような方法ではだめですと、神が備えてくださった救いが不完全だと主張するのです。私たちの考える人を救う方法のほうが、聖書が教える神の方法よりも賢いと思っているのです。ベターだと思っているのです。だから、人々は神がこのようにしてあなたを救うというメッセージを聞いても、それに関心を示さないのです。自分が考えていること、自分が信じて来たこと、自分が守って来たことの方が正しいと思っているからです。このように、人間は神を見上げるのではなく自分を見ているのです。神の教えではなく自分の考えに従おうとするのです。自分は賢いと思っているからです。それゆえに、様々な宗教が存在してきたのです。自然界の不思議を見て、みことばが教えているようにそこには何かが存在する、神とは言わなくても何かが存在するということを人々は認めます。そして、それを真剣に見るとき、そこにはすばらしい調和があり知恵があり力があり、そのようなものをもってすべてを創造された創造主を見出すことができるはずですが、しかし、人間はそれはあり得ないこととして横において、自分たちの考えに基づいて様々な宗教を作り出すのです。

ほとんどの宗教の根本にある一つの教えは、精霊崇拜、アミニズムといわれるものです。この教えはすべてのものに霊が宿っているというものです。日本人がこのようなことを聞くとよく分かります。私たちが生まれながらに教えられて来た、また、守って来た宗教はそのようなことを守っているからです。八百万の神々とはたくさんの神がいると意味です。すべてのものに魂があると。どこからそのような教えが出て来たのでしょうか？みなこの宇宙をこの自然界を見ているのです。そして、彼らが引き出した結論は、すべてのものに霊が宿っているからそれを崇拜しようというのです。そして、私たちはそのような社会に生まれ、そのようなことを行なって来たのです。神は自然界を造られてご自身を明らかにしておられるのに、なぜ、このようになってしまったのでしょうか？簡単です、みことばが教えるとおりに、私たちは知者であると思っているからです。何でも知っており、何でも解明できていると思っています。しかし、私たちが明らかにしていることは「愚かである」ことです。栄光にあふれた永遠に存在され、罪が全くないお方、死を経験することのないお方が、どうして、死を恐れて生きている人間や必ず死んでしまう動物と同じなのでしょう？あり得ないことです。人間がいかにこのすばらしい神を私たちの次元に引き降ろしてしまっているのか、この罪、プライドが問題なのです。ですから、多くの人々はみことばを聞いても、そのみことばに神に心を開こうとしないのです。

2002年の統計ですが、日本には宗教がどれくらいあるのか、驚くべき数です。182,634もあるのです。これは宗教統計調査によるものですが、これだけの数の宗教が私たちの国には存在するのです。なぜでしょう？私たちは賢いと思っているのです。何でも知っていると言います。地球がどうしてできたかも知っていると言います。人間がどのようにして誕生するようになったかも知っていると言います。そこに問題があるのです。先週、二人のゲストが来られました。中国で宣教の働きをしてその帰りにこちらに寄られたということでお会いしました。いろいろな宣教の話を書きましたが、大変なことが世界中で起こっているとそのような話をした後、何をしたいですか？と尋ねたところ、実は私は妻に真珠を買って帰りたいとのこと、百貨店でそれを求めて喜んでお帰りになりました。真珠を買いたいと言われたとき、私たちは偽物売っているようなところにはお連れしません。本物を求めている人に偽物売することはしません。私たちがしていること、人間がしていることは、神が無償で本物を与えてくださるというのに、偽りのものに高額を払っている、まさにそのようです。つまり、この救いは神の恵みによって信じるすべての人に無償で与えられるものです。ところが人間は、自分の永遠のいのちという取り戻すことのできない高価な代価を、偽物に払おうとしているのです。ただの気休めではない、本当に神

が私たちのすべての罪を完全に赦してくださるこの本物の救いがあるのに、人々はこの救いではなくて人間が作り出した偽りの救いのために自分の永遠を払おうとしているのです。いかに愚かなことでしょうか？このような私たちがどうして神の前に賢いと言えるのでしょうか？イザヤ40：25-26でこのように言っています。「**それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか。**」と聖なる方は仰せられる。**：26 目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。」**と、いったいわたしをだれと比べようとするのか、いったいどのようなものがわたしと比較できるのか、人間も人間の造ったものも動物も、わたしと肩を並べるものがどこにいるのか？わたしのような完全な神が他にどこにいると言うのか？と、だから、イザヤは言います。「**目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。**」と。神が造られた自然界を見てごらん下さい、そのときに、もしあなたが心から真理を求めようとするなら、わたしを見出すと言います。

私たちは「罪人がさばかれる二つの理由」を見て来ました。一つは、神の存在を認識していながらその神を受け入れない罪、それゆえにさばかれると19-20節で見ました。もう一つは、神の栄光を辱めるその罪ゆえに、21-23節で見て来ました。私たちは海外に行くとき空港でこのようなポスターを見ます。偽ブランド品、コピー製品の日本への持ち込みは禁止であると、ご覧になった方はたくさんおられるでしょう。物をコピーして売るとは犯罪です。偽物を作ることも犯罪です。私たち人間を見てください。私たちは神を造っていても有罪にならないと思っているのです。すべての創造主なる真の神を造ることは大きな罪です。そのような罪を犯しているゆえに、その罪人は必ずさばかれる、当然の結果です。パウロは私たちにこのような罪ゆえに罪人はさばかれること、そして、このような理由を見る限り、だれ一人として「私は無罪だ」と言える罪人は存在しません。この中に、まだイエス・キリストを信じていない方がおられるなら、これはあなたの姿です。このようにあなたは神に逆らい続けている、ゆえに、あなたの罪は必ずさばかれます。それにあなたは何の弁解も反論もできないのです。今、その罪を悔い改めて主の前に救いを求めて出て来ることです。神は赦してくださり救いをくださいます。それが今日であることを心から願います。クリスチャンである皆さん、私たちは確かにこのようなものから救い出されました。しかし、私たちは救われた者として神の前にふさわしい生き方をもって、感謝を現わしているのでしょうか？神を神として崇めているのでしょうか？それは救われた私たちが考えなければいけないことです。どのような信仰の歩みをもってこのすばらしい恵みを感謝しているか？そのことを考えてみこころに従って歩むことです。み旨を為す者としてください、それが私たちの願いであり、私たちの祈りであるはずで